

平成21年6月23日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2008

課題番号：19720118

研究課題名（和文） 英語譲歩節の特殊性に関する機能言語学的研究

研究課題名（英文） Distinctive Properties of English Concessive Clauses: A Functional Analysis

研究代表者

水野 優子 (MIZUNO YUKO)

旭川工業高等専門学校・一般人文科・准教授

研究者番号：90435397

研究成果の概要：本研究は、電子コーパスの新聞記事と小説から収集したデータ、及び英語母語話者から提供された例文を用いて、以下の点に取り組んだ。(1)英語の副詞節全体における譲歩を表す副詞節の特殊性を「等位節らしさ」という観点から明らかにした。(2)although 節の用法には少なくとも五種類あることを示し、それぞれの用法の頻度を明らかにした。(3)although 節と though 節を比較し、この二つの譲歩節は用法の種類、及びそれぞれの用法の頻度において大きな差が見られないことを示した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	270,000	2,270,000

研究分野：英語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語学、機能言語学、複文、副詞節、譲歩節、等位接続、従位接続、接続詞

1. 研究開始当初の背景

複文、すなわち2つ以上の節から構成される文は、伝統的に等位接続と従位接続に2分され、さらに従位接続は補文、関係節、副詞節に分類されてきた。しかし、近年の類型論的研究 (Foley and Van Valin (1984)、Haiman and Thompson (1984)等)では、複文は厳密に2分できるものではなく、「等位接続らしさ」、「従位接続らしさ」には段階性があると主張されている。英語の副詞節に関しては、Lakoff (1984)、Verstraete (2005)等により、主節に対して後置される副詞節の方が、前置される副詞節よりも等位節らしい、すな

わち主節への従属度が弱いと主張されている。しかし、依然として英語の副詞節は未解決な問題を多く含んでいた。副詞節は、意味・機能によって譲歩節、理由節、条件節、時を表す副詞節等に分類できるが、副詞節の種類によって従位節らしさがどの程度異なるのかが分かっていないことがその1つである。もう1つは、同じ種類に分類される副詞節でも、接続詞の違いによってどのような使い分けがされるかが分かっていないことである。大石(1977)は、副詞節の中でも譲歩節と理由節は最も等位節らしく、時を表す副詞節は最も従位節らしく、条件節はその中間で

あるという仮説を立てている。しかしながら、この仮説の妥当性はまだ十分に検証されていない。多くの研究が、人工的に作られた例文をデータとして用いているためである。さらに、副詞節の等位（従位）節らしさを測る尺度が確立されていないためである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「第一に、英語の副詞節全体における、譲歩を表す副詞節の統語的、意味論・語用論的な特殊性を明らかにすること、第二に、異なる接続詞によって導かれる譲歩節の共通点と相違点を明らかにすること」であった。具体的には、以下の3項目に取り組むことを目的とした。

- (1) 副詞節の等位（従位）節らしさを測る尺度を確立し、電子コーパスから豊富なデータを収集・分析して異なる種類の副詞節の等位（従位）節らしさを記述する。
- (2) 副詞節の種類によってなぜ等位（従位）節らしさが異なるのかを説明する。
- (3) 電子コーパスから収集したデータ分析に基づき、異なる接続詞によって導かれる譲歩節の談話機能の違いを記述する。

3. 研究の方法

平成 19 年度の研究では、第二の目的、すなわち異なる接続詞によって導かれる譲歩節の談話機能の共通点、相違点を分析するための土台として、König (1994)が提案した *although* 節の三分類、すなわち「標準譲歩 (Standard Concessive)」、「修辞譲歩 (Rhetorical Concessive)」、「訂正譲歩 (Rectifying Concessive)」が、実例でどのように具現するのかを調査した。König (1994) は、前置、後置 *although* 節はどちらも「標準譲歩」と「修辞譲歩」を表すことができるのに対し、「訂正譲歩」は常に後置 *although* 節に導かれると主張している。言語資料としては、2006 年 8 月 16 日付の電子コーパス、LexisNexis の英字新聞から収集した計 196 例の *although* 節の用例を用いた。データの内訳は、前置 *although* 節が 107 例、後置 *although* 節が 89 例であった。

平成 20 年度の研究ではまず、平成 19 年度の研究で提案した *although* 節の五つの分類、すなわち「標準譲歩」、「修辞譲歩」、「訂正譲歩」、「対比 (Contrast)」、「発話行為 (Speech Act)」を用いて、*although* 節と *though* 節の談話機能の比較調査を行った。言語資料としては、電子コーパス The Corpus of Contemporary American English に 2004 年から 2007 年にかけて収録された小説から計 192 例の *though* 節の用例を収集、分析し、平成 19 年度に調査した *although* 節の分析結果と比較した。データの内訳は、前置 *though*

節が 74 例、後置 *though* 節が 118 例であった。

次に、英語の副詞節全体における *although* 節の特殊性を明らかにするため、Veestraete (2007)が提案している複文（従来、等位接続と副詞節として分類されてきたもの）の四分類、すなわち「等位接続 (Coordination)」、「様相従位接続 (Modal Subordination)」、「自由従位接続 (Free Subordination)」、「拘束従位接続 (Bound Subordination)」における *although* 節の位置づけを検証した。言語資料としては、電子コーパス LexisNexis の英字新聞から収集した *although* 節の用例、及び英語母語話者から提供された例文を用いた。

4. 研究成果

本研究は、主に以下の三点を明らかにした。

(1) 英字新聞から収集した 196 例の *although* 節を調査した結果、まず、König (1994)の主張と異なり、前置・後置 *although* 節は、用法の種類に差はなく、違いはそれぞれの用法の頻度にあることが分かった。すなわち、前置と後置 *although* 節はどちらも標準譲歩、修辞譲歩、訂正譲歩、対比、発話行為の用法があるが、前置 *although* 節の大部分は標準譲歩を表すのに対し、後置 *although* 節の大部分は訂正譲歩を表すことが分かった。さらに、訂正譲歩の *although* 節は、これまで単一のカテゴリーと考えられてきたが、実際にはそうではなく、新たに三つの下位クラス、すなわち「想定取り消し (Cancelling Assumption)」、「妥当性の弱化 (Weakening Validity)」、「例外 (Exception)」の存在があることを示した。*although* 節の各用例の内訳は以下の表 1、2 に示した通りである。

談話機能	用例数
標準譲歩	74 (69%)
修辞譲歩	20 (19%)
発話行為	3 (3%)
対比	3 (3%)
訂正譲歩	7 (6%)
計	107

表 1 前置 *although* 節の談話機能

談話機能		用例数	
訂正譲歩	想定取消	33	82 (92%)
	妥当性弱化	7	
	例外	9	
	その他	33	
発話行為			2 (2%)
対比			1 (1%)
不明			4 (4%)
計			89

表 2 後置 *although* 節の談話機能

以上の although 節の分類は、although 以外の接続詞によって導かれる譲歩節の談話機能の共通点、相違点を分析するための有効な土台となるものである。

(2)小説から収集した192例の though 節を調査し、上記(1)に示した although 節の分析結果と比較した結果、まず共通点として、although 節と同様に前置 though 節の大部分は標準譲歩を表すのに対し、後置 though 節の大部分は訂正譲歩を表すことが分かった。一方相違点としては以下のことが分かった。第一に、although 節では前置用法が55%、後置用法が45%と、前置用法の頻度が後置用法に比べてやや高かったのに対し、though 節では後置用法が61%、前置用法が39%と、後置用法の頻度が前置用法に比べて高かった。第二に、although 節では前置・後置両方に五つの用法(標準譲歩、訂正譲歩、修辭譲歩、対比、発話行為)全てが見られたのに対し、though 節では前置、後置両方に標準譲歩、修辭譲歩、訂正譲歩、対比の用法が見られたものの、発話行為の用法は一例も見られなかった。though 節の各用例の内訳は以下の表3、4に示した通りである。

談話機能	用例数
標準譲歩	57 (77%)
修辭譲歩	6 (8%)
訂正譲歩	5 (7%)
対比	1 (1%)
発話行為	0 (0%)
あいまいな用法	5 (7%)
計	74

表3 前置 though 節の談話機能

談話機能	用例数
標準譲歩	12 (10%)
修辭譲歩	2 (2%)
訂正譲歩	70 (59%)
対比	1 (1%)
発話行為	0 (0%)
あいまいな用法	33 (28%)
計	118

表4 後置 though 節の談話機能

以上の研究により、従来見逃されてきた although 節と though 節の共通点と相違点を明らかにすることができた。

(3)英語の副詞節全体における although 節の特殊性を明らかにするため、Verstraete (2007)が提案している複文の四分類における although 節の位置づけを検証した。Verstraete は[±Speech Function (発話機能)]、[±Modality]、[±Scope (作用域)]という三つのパラメータを用いて、従来等位

接続及び副詞節とされてきた複文を四つに分類している。Verstraete によると、前置 although 節は、対比を表す副詞節(whence 節、when 節、while 節)、結果を表す副詞節(so that 節)、正当化(justification)を表す副詞節(as, since)と共に様相従位接続(Modal Subordination)に分類される。一方後置 although 節は、正当化を表す because 節、及び従来等位接続とされてきた but、and、or、for で結ばれる複文と共に等位接続(Coordination)に分類される。さらに、[±illocutionary restriction (発話内行為制約)]という二次的パラメータを用いて、等位接続の中でも、後置 although 節は、and、or、but とは区別され、because 節と同じカテゴリーに分類されている。このように、Verstraete の分析では、although 節は時、理由、条件を表す副詞節よりは等位節らしいものの、and、but、orよりは従位節らしいとされている。しかし、実際の言語データを観察、分析した結果、Verstraete の主張とは異なり、although 節は前置、後置どちらの場合も独自の発話内効力を持つことができ、さらに前置、後置どちらも「断定」に加え「命令」の発話内効力を持つという点で、英語の副詞節の中で唯一、but、and、or と同じ等位接続のカテゴリーに属することが分かった。Verstraete の複文の四分類における although 節の新たな位置づけは表5に示した通りである。

等位接続	[－発話内行為制約]	and, but, or, <i>although</i>
	[＋発話内行為制約]	because, for, but
従位接続	様相(modal)	whereas, as, so that, since, when, while
	自由(free)	after, before,
	拘束(bound)	when, while, if, once, so that, until, because, as, since

表5 Verstraete の四分類における although 節の新たな位置づけ

以上の研究により、従来見逃されてきた副詞節全体における although 節の特殊性を明らかにすることができた。

今後に残された主な研究課題は、以下の三点である。第一に、今回の研究では Verstraete による複文の四分類を用いて、英語の副詞節全体における although 節の特殊性、特に、前置、後置 although 節のどちらも断定だけでなく命令の発話内行為を持つことができ

ることを明らかにしたが、although 節にこのような特殊性があるのはなぜかをまだ説明できていない。今後は、although 節以外の副詞節も含めて、なぜ副詞節の意味によって等位節（従位節）らしさが異なるのかについて調査する予定である。第二に、although 節と though 節の比較をより精密に行うことである。今回の研究では、although 節の用例は新聞記事から、though 節の用例は小説から収集して分析したが、今後は複数のジャンルのテキストからそれぞれの用例を収集し、ジャンルごとに although 節と though 節の談話機能の比較を行う予定である。また、英語使用国間の用法の違いについても考察していきたい。第三に、今回の研究で提示した although 節の分類の定義をより明確にすると共に、この分類を土台にして他の譲歩節（even though 節、even if 節、while 節）の談話機能を明らかにし、異なる接続詞によって導かれる譲歩節の共通点と相違点を明らかにすることである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 1 件）

① 水野優子、A Quantitative Analysis of *Although* Clauses in Naturally Occurring Discourse、Conference on Language, Communication and Cognition、2008 年 8 月 6 日、ブライトン大学（イギリス）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水野 優子 (MIZUNO YUKO)

旭川工業高等専門学校・一般人文科・准教授

研究者番号：90435397

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし